



## YAGIPEDIA

沖縄ヤギ 最近の事情

### 「山羊の里」名護市勝山の仲里政和さん

#### 愛情かけ優良種育てる

嘉津宇岳・安和岳の山々に囲まれた名護市の勝山集落。シークワサーのブランド化に次いで、力を入れているのがヒージャーだ。明治期以降、ヤギ飼育が盛んだったことから「山羊の里」とも呼ばれる勝山区。戦後、食糧難でアメリカから乳用ヤギが移入された地域の一つでもある。毎年3月、シークワサーの開花時期に開かれる「花祭り」には、本場のヒージャー汁と勇壮なヒージャーオーラセーを目当てに県内各地から多くの客が訪れる。

「区民よりヤギの数が多い」と語るのは、「名護市勝山山羊生産組合」組合長の仲里政和さん(69)。ボア種やヌビアン種など、交配用ヤギのブリーダーだ。名護市は3年前、ヤギ肉増産を目指し、市の備品として優良種を購入し、農家に貸し出す事業を始めた。最初の6頭を預かったのが仲里さんだっ

た。増やしたメスを3年間貸し出し、産まれたメスを返納する仕組みで、これまでに約20頭が貸し出された。同様の事業は名護市のほか、石垣市でも行われている。

現在、ヤギには牛のような肉質の等級評価はなく、1頭当たりの肉量が生産者の収入に直結する。仲里さんいわく「勝山は山間部で、エサになる木の葉が豊富。そこで育つ勝山産には自信があるよ」と胸を張る。

しかし他の家畜に比べ食肉処理



優良な種ヤギを育てる仲里さんと、大好物のセンネンボクにむらがるヤギたち。小屋は風通しの良い高床式。落ちたフンは肥料として、シークワサー畑にまいている＝名護市勝山

にかかる手数料が割高な点など、農家にかかる負担は重い。仲里さんは「生産基盤を強化するには、生産者への補助制度や、生産・解体・販売までの規制を緩和する特区の設置など、柔軟な発想が今後には必要になる」と指摘している。

#### 家畜ヤギいろいろ



1950年代の池間島の家屋と石垣の様子  
＝平良市立池間中学校創立50年記念誌



#### 池間島はヤギの代わりにミルク酒

1957年9月、沖縄を襲った台風4号「フェイ」は、RC造を普及させる引き金となった。当時、中学生だった池間島出身の比嘉節さん(74)は、全壊した学校のRC造建て替えに携わった一人。PTA会長の鶴の一声で一家庭、子ども一人につき1斗缶のバラスを提供することになった。バラスは、自宅の石垣や畑の垣根の石も使った。

「今では笑い話だが、子だく

さんの家は大変で、知らぬ間に垣根の石までなくなつて」。大人も子どもも総出で運んだ石をハンマーで砕き、コンクリートに混ぜたという。棟上げ式はヤギの代わりにコンデンスミルク入り泡盛、通称「ミルク酒」を大量にふるまう風習があった。建材は1日1隻の船で運ぶ分のみ、人海戦術で毎日、大量の石を運んだという。

## RC造はユイマールの歴史



### 琉球大学工学部副学部長 小倉暢之教授に聞く

沖縄戦で灰じんと化した街の風景を戦後、一変させたRC造。今や現代沖縄の建築物の象徴となっている。RC造の歴史に詳しい琉球大学工学部・副学部長の小倉暢之教授に聞いた。

RC造が一般に普及したのは戦後の米軍基地建設に由来するが、1920～30年代には出現していた。旧大宜味村役場庁舎は最古のRC造と言われている。今でいえば「初めて超高層ビルを作ったような感動」に例えられるほど、当時は国内でも最先端の建築技術を駆使した建物だった。設計は鹿児島出身で国頭郡建築技手だった清村勉氏。同氏が手がけた伊江村の「公益質屋跡」も

現存する戦前のRC造で、コンクリート導入の歴史をひもとく上で注目される施設である。

当時の沖縄は資源が乏しく、セメントは九州、秩父辺りから木のたるに入れて持ってきたという説もある。施工は高い技術力を誇った大宜味大工たちの手で行われた。しっかり川砂と砂利を洗って塩分を抜いて品質管理を徹底し、重機もない中、人力でコンクリートを突き固めた。基本に忠実、これが今も現存する技術力の証であろう。生真面目な大宜味大工たちは、那覇の復興にも貢献した。この功績は、県内で建設に携わる者に受け継がれるべき「沖縄の宝」である。

セメントが県内で生産されたのは1965年からである。こ



1926年に建てられた県内で現存する最古の鉄筋コンクリートの建造物「旧大宜味村役場庁舎」



戦後の沖縄では、素人でも作りやすかったCB(コンクリートブロック)造も普及した。学校建築ではPTAを中心に、大人も子供も加勢した。写真は那覇高校の校舎建設の様子。春休み、懸命に作業に励む生徒たち＝1952年3月25～27日、那覇高校

れは51年のサンフランシスコ平和条約締結以降、沖縄に米国の恒久的な軍事基地を保持のため、県民の自立を促す経済政策「琉球列島経済計画」が進められたことに由来する。復興の重要産業として本島北部の一山村だった屋部にセメント工場が設立されると、沖縄のRC造建設技術は飛躍的に発展する。

当時の技術は本土のスーパーゼネコンも驚くほどで、黒部第4ダム建設、東京オリンピック施設建設のときには、沖縄の重機オペレーターなど、建設技術者が大量に引き抜かれた。日本の高度経済成長期を影で

支えたのも沖縄だった。

1960年代、RC造は、戦後の住宅不足や大型台風の襲来、シロアリ被害対策を受け、コンクリート技術の習得が進むと同時に、融資制度の導入などさまざまな要因で沖縄全域に急速に普及し定着していく。県内離島に至るまで資材と現場監督が派遣され、学校や公民館、住宅が建てられた。当時は今と違い、PTAなど地域住民が一丸となって校舎建設に当たり、スラブ打ち(棟上げ式)ではヤギ汁が振る舞われた。ヤギは「お疲れさまの証」だった。

戦後復興の中、住民が一丸となり手作りしてきた独特な建築文化は、地域の絆「ユイマール」の歴史でもある。それを理解するために古いRC造を残してほしいという声も多々ある。過去を知ることは人生を豊かにする。先人たちへの感謝を忘れてはいけない。(談)

HPCの大屋根で木陰をつくった建物の事例  
＝琉球銀行牧港支店(渡久山設計提供)



#### 薄くて軽くて、しなる! 沖縄からコンクリート新素材

厚くて、重くて、硬いイメージを覆す新しいコンクリートが沖縄で誕生している。「HPC沖縄」(南城市)が開発した「ハイブリッドプレストレストコンクリート」(通称HPC)は、さびの原因となる鉄筋の代わりに炭素繊維を使うことで、厚み4割という薄い板状の加工を実現した。HPC製造にはリユウクス(うるま市)の「加熱改質フライアッシュ」という良質の石灰灰が欠かせない。この素材を使うことでコンクリートの型枠の流し込みが容易になり、塩害に強く耐久性が高まる。「次世代型コンクリート」の新素材として注目が集まっている。

あなたは、ほかの誰とも違う。

生きてきた環境が違えば、見えている世界だって違うかもしれない。

でも、私たちは同じだ。同じように夢を持ち、同じ空の下で暮らしている。

この世界で、ともに生きるために。

大和ハウスは、人が生きていく環境すべてをよりよいものにしていきたい。

2020年の東京で、あたらしい景色をつくろう。

世界の人たちが違いを越えて、ひとつになれる場所を。社会の中にある壁を乗り越え、

ともにチャレンジできる場所を。それを見た人たちの心には、あたらしい常識が生まれる。

私たちは、違う。私たちは、同じだ。

# One Sky

家、そして近未来をつくる。



TOKYO 2020



Daiwa House



TOKYO 2020

東京2020オリンピック施設建設住宅開発パートナー